

横山ゆずり作

「先輩仁義」

(効果音) (教室のガヤ)

中沢義男 オーツス！

松本法子 あ、中沢君、おはよう。

義男 おはよう。…お、いたいた。健二、あのさ…。

小野健二 なんだよ、義男。朝からいきなり。

義男 うん。お前にちょっと話したいことがあってさ。

健二 話？ あ、義男。お前、さては…。

義男 バカ、違うよ。おめえはすぐそっちのほうに考えが行くんだから。

法子 “そっちのほう”って？

義男 関係ないの。実はさあ…。(FO)

義男ナレーション おれは、中沢義男。青春中学 2 年B組。成績は“中の下”ぐらいかな。親友、と
いうか悪友の健二と一緒にロックバンド組んだりして、大いに遊び、ちょっぴり
学ぶって感じの、自称“ネアカ少年”。

義男 話ってのはさ、お前、この辺の高校生で、“ヒダカ”とかいう人、知らないか？

健二 ヒダカって、もしかして、〇〇高校の飛高さんのことか？

義男 あ、そう言えば、〇〇高の制服着てたかな。健二、知ってんのか？

健二 バカ。お前、〇〇高 2 年の飛高竜太郎っていったら、ちっと有名だぜ。この辺
の高校のツッパリ連中も、だれもあの人には、頭上がんないらしいぜ。

義男 そっか。道理で。

健二 お、おい、義男、お前まさか、日高さんに何かしたとかいうんじゃないか…。ヤ、ヤベ
エよ、そりゃ。

義男 落ち着けよ。実は、昨日さ…。

(音楽) (ブリッジ。回想)

義男 今日は、バンドの練習、きつかったなあ。わあ、もう真っ暗だ。

男子A おい、ちょっと待ちな。

義男 な、なんだよ。

男子B 青春中か。おれたち、今さあ、小遣い足んねえんだよ。ちょっと貸してくんねえ
かなあ。

義男 か、金なんかないよ。

男子A なんだと？

男子B さけんなよ！ おい、いいギター持ってんじゃない。金がなきゃ、これでもいい
ぜ。

義男 何すんだよ。返せよ。

男子B この野郎、痛い目見たいのか？
(効果音) (しばらくもみ合う)
飛高竜太郎 おい、お前ら、何やってんだ？
男子B うるせえ！ …あ、ヒ、飛高さん。
男子A ヤベェ。
飛高 お前ら、「学中には手え出すな」って、いつも言ってんのが分かんねえのか？
男子A す、すみません。
男子B し、失礼しました。(2人、そそくさと逃げ去る)
飛高 お前、青春中か？ 何年だ？
義男 2、2年、中沢、ヨ、義男です。
飛高 2年の中沢か。よし、分かった。気をつけて行けよ。
義男 はい、ありがとうございました。
(音楽) (ブリッジ。回想終わる)
健二 へえ、そういうことか。焦らすなよ。
法子 カッコいい、その人。
義男 「気をつけて行けよ」かなんか言っちゃってさ。シブいぜ、ほんと。
健二 いいなあ。おれも一度会ってみたいよ。
ナレーション そんなことがあってから、数日後だった。
義男 (オフ)おーい！ (オン)おい、健二。すごいぜ。
健二 なんだよ。何暑くなってんだよ。
義男 これが落ち着いてられるかって。聞いて驚くぜよ。ゆうべさ、電話あったんだ、飛高さんから。
健二 えー！ マジかよ、それ。
義男 うん。正確には、飛高さんの代理の人だったけどさ。
健二 そ、それで、なんだって？
ナレーション それはなんと、飛高さんのグループに入らないかという誘いの電話だった。もちろん、おれは即オーケーした。それからはもう、授業が終わると先輩たちの溜まり場に入り浸る、という毎日だった。
(効果音) (終業のチャイム)
法子 ちょっと中沢君。何、その髪型。それに、ズボン、ダボダボじゃない。先生に目つけられるわよ。
義男 平気平気。いいだろ、これ？ 先輩のお古、もらっちゃったよ。あ、まずい、オバちゃんだ。
ナレーション おれたちの担任は、湯川典子という先生だった。でもだれも、“湯川先生”なんて呼ばない。みんな、“オバちゃん、オバちゃん”と言っていた。どうして“オバちゃん”かというと…。

湯川先生 あーら、中沢君。あんたそのカッコ、どうしちゃったの？ ヤクザさんに弟子入りでもしたの？

義男 そりゃないっすよ。

湯川先生 ま、イキがるのもほどほどにしときなさいよ。
(効果音) (“バシ”っと義男の肩をたたく。)

義男 いてえ！ すんごい力。

湯川先生 なーんだ。軟弱者め。

ナレーション …とまあ、いつもこんな調子で、まるで近所の八百屋かどっかのオバちゃんみたい。でもサバサバしてて、結構話が分かるんで、おれはまあ気に入ってる。おれらの話、ちゃんと聞いてくれる先公なんて、そういないもんな。なんでもオバちゃんは、キリスト教だとかで、ホームルームで時々キリストの話とかしてくれる。結構面白いんだけど、キリストが出てくると話が長くなる、ってのが玉にキズかな。

湯川先生 ところであんた、最近、高校生と付き合ってるんだって？

義男 え、まあ。でも別に悪いことしてないっすよ。それに、先輩には、前に助けてもらった義理もあるし。やっぱ、仁義通さないと。男のケジメですよ、ケジメ。

湯川先生 義理も結構だけど、強いやつを後ろを金魚のフンみたいにくつついてたって、ちっともカッコよくないんだからね。気をつけなさいよ！

ナレーション なんて言われようと気にしなかった。だっておれには、泣く子も黙る飛高先輩がついてる、と思ってたから。そんなある日――。

飛高 おい義男。

義男 はい！

飛高 お前のダチで、グループに入りそうなやついないか？ 実は今度、ちょっとデカイ計画があつてな。学中のやつにも手伝ってもらいたいんだがな。

義男 えーと、あ、います、いますよ。仲いいやつで、小野健二っていうんですけど、なんなら、今呼んでみましょうか？

飛高 いや、いい。あとでこっちから連絡するから。

ナレーション そう言われたもんで、おれは、検事の電話番号だけ先輩に渡した。健二は、おれのこと、うらやましがってたから、絶対喜ぶと思った。それが、まさか、あんな事件になるなんて、思ってもみなかった。

次の日、健二は学校を休んでいた。

法子 ちょっとみんな、大変よ！

生徒たち (口々に)「どうしたの？」「何があった？」

法子 今、校長室にお巡りさんが来てるの。なんでも、ゆうべ、この辺の突っ張りグループ同士の大きなケンかがあったらしいの。それで、だれかがナイフ持ってて、相手の1人を刺しちゃって、病院に運ばれて重態なんだって。

ナレーション 飛高さんたちだ、とその時おれはピンと来た。こないだ言った、「デカイ計画”ってこのことか。でも、何でおれに声かけてくれなかったんだ？

男子 B それで、なんでうちの学校に警察が来るんだよ？

法子 それなのよ、大変なのは。うちのクラスの小野君が、そん中にいたんだって！

義男 健二が？ お前、ほんとだよ、それ？

法子 確かよ。だってあたし、校長室にオバちゃんが呼ばれて、お巡りさんと話してるの、聞いたもん。(義男、急いで出ていこうとする。)あ、中沢君、どこ行くのよ？

男子 B おい、義男！

義男(モノローグ) (走りながら)なんで健二のやつが？ そうだ、いつもの場所に行けば、先輩たちがいるかもしれない。

(効果音) (ドアをノック)

義男 失礼します。

飛高 あ、お前か。来ると思ってたぞ。

義男 先輩。あの、健二のことなんですけど。

飛高 ああ。あいつをお前から紹介してもらったお陰で助かったよ。ま、あいつにはちょっと気の毒だが、こっちは、うまくやつらのリーダーをブチのめしたからな。

義男 どういうことですか？

飛高 おい明美、こいつに話してやれ。

明美 いいよ。この子なの、竜が目をかけてやってる子って？ 結構かわいいじゃない。あんたの友達の健二って子、ゆうべ、あっちのグループのリーダーを刺したのよ。

義男 え、ウソだ！ そんなまさか…。

明美 (大笑い)ウソに決まってるじゃん。本当は竜がやったんだよ。でも、健二って子がやったってことになってんの。竜は、マッポに目つけられてるから、やったのがバレるとヤバいんだ。でも、学中なら処分も軽いからさ。だれか、身代わりのやつ探してた時、あんたにちょうどいい子紹介してもらって助かったよ。

男子 B 初めはあいつも抵抗したけど、少々カツ入れたら、「うん」て言ったよ。今ごろはマッポに「おれがやりました」って言ってんだろ。ま、飛高さんの代わりだ。光栄に思わなくちゃな。

義男 それじゃ、ぬれぎぬじゃないか。

男子 B なんだ、てめえ、その言い方は！

飛高 やめとけ。こいつも今に分かるようになるさ、物事の筋ってもんが。

明美 あんた、分かっているだろうけど、ヘンな気起こすんじゃないよ。もしチクリでもしたら、今度はあんたがやられるんだからね。

(音楽) (ブリッジ)

ナレーション おれは、頭の中がグルグル回って、何を考えているのか、自分で分からなかった。

義男(モノローグ) おれら、先輩に利用されてたんだ。そうとも知らずに、おれは、ホイホイと、先輩たちの計画の片棒担いで。そして健二に取り返しのつかないことしちゃった。…そうだ、警察に行って、本当のこと言わなきゃ。「健二じゃない」って。でも、そしたら…。

明美 (エコー)もしチクリでもしたら、どんな目に遭うか、分かってるわね！

義男(モノローグ) あー、ダメだ。おれは言えない。おれ、おれ、どうしたらいいんだよー！

(音楽) (ブリッジ)

ナレーション 結局おれは、健二を見捨てた。情けないが、先輩たちに逆らうのは、怖かったのだ。そして、そんな自分にトコトン嫌気が差した。もう、惨めの極致だ。次の日の放課後、おれは、担任の湯川のオバちゃんに呼ばれた。

湯川先生 小野君のこと、何か聞いている？

義男 い、いいえ、知りません。

湯川先生 そ。あんた親しいみたいだったから言っとくけどね。あのうわさ、ほら、刺したのなんのってのね。あれ、小野君じゃなかったってね。警察で指紋とって分かったんだそうよ。それにしてもあの子、なんで「自分だ」なんて言ったんだろうね。心当たりない？

ナレーション おれは、正直言ってホッとした。そしてその時、昨日から心の奥に閉じ込めていたものが、一気に吹き出してくるのを感じた。これは、おれにとって最後のチャンスだ。友達を裏切ったおれだけど、あんな惨めな気持ちは、もうイヤだ。おれは、思いのままに、一切を先生の前にぶちまけた。

湯川先生 …そう。それであんた、今、自分のやったこと、後悔してるんだね？ 分かるよ。あたしだって、偉そうに教師なんかやっても、自分の弱さや心の汚さに、イヤになるからね。自分の力じゃどうにもならないんだよ。だからあたしはキリスト様に頼って生きてるんだ。ねえ、人間の罪ってのは、厄介だよ。あんたも今、それを持って余してんだと思うけど、それは人間の力じゃどうにもならないんだよ。

ナレーション そう言いながら、先生は聖書を開いて、キリストの話をしてくれた。オバちゃんの話は半分も分からなかったけど、1 つだけ、グサッと来た。「罪」っていうこと。言葉は知っていた。でもおれが健二にやったこと、それが「罪」なんだ。おれは、その重みを全身で受け止めていた。そんなおれの心に、オバちゃんの読んでくれた聖書の言葉が、なぜかいつまでも残っていた。「神のみ心にそった悲しみは、悔いのない、救いに至る悔い改めを生じさせますが、夜の悲しみは死をもたらします。」(Ⅱコリント 7:10)

<完>